

雄国沼湿原と猫魔ヶ岳(福島県)

念願の雄国沼と近くに聳える猫魔ヶ岳

雄国沼には、以前から「ニッコウキスゲを見に行きたい」と思っていた。そしてテレビ番組「日本百低山」で猫魔ヶ岳登山の様子を見て、「この二つをセットで登ろう」と考えた。

当初、喜多方市からのアプローチを検討したが、「私の脚力では二日かけるのが妥当」と判断し、宿に2泊の予約をいれて出かけた。

懐かしい会津磐梯山とさびれた駅前

6月30日、早朝に自宅を発ち、近鉄～新幹線～新幹線～新幹線と乗り継ぎ、猪苗代駅に降り

↑猪苗代駅前からの会津磐梯山

立ったのが12時52分。眼前にそびえる会津磐梯山の雄姿が懐かしい。

宿からの迎いの時刻は15時なので、昼食をと思い、駅前商店街を歩いた。駅前を歩くのは初めてだったが、まさに「シャッター街」なのには驚いた。猪苗代湖、多くのスキー場、リゾート地・裏磐梯を抱える地としてはあまりにも寂しい。

送迎車の運転手さんも、バブルがはじけて以後の長期の不況、人口減、そしてコロナ禍の追い打ちで、すっかりさびれてしまったことを道々話してくれた。

自然のただなかの宿も懐かしい

車は磐梯山東麓の森林の中を走り抜けて、宿に到着。この「休暇村裏磐梯」には19年前の秋、高校同期同窓生と恩師1人の21名で泊まったことがある。その時は西吾妻山、磐梯山、安達太良山、3つの百名山を登ったのだ。

夕食までの時間を散策にあてた。そのための遊歩道が設けられており、受付で「熊が出るのでハス沼の方には行かないように」との注意を受け、熊ベルを鳴らしながら歩いた。熊も出なかったが花も少なかった。

森林の中を歩いて雄国沼に

7月1日、宿の送迎車で雄子沢(おしざわ)登山口に。8:40登山開始。樹々の中を緩やかに登っていく。心地よい森林

↑ヒオオギアヤメ 浴だ。9:50 雄国沼休憩舎着。予定より10分早く着いたが、前を歩いていた中高年グループは湿原目指して、すでに出発していた。休憩舎は広々として清潔。トイレも清掃が行き届いていた。小屋の維持管理に携わる人々に感謝。

ここから幅広の砂利道を20分ほど歩き、10:30 湿原の木道に到着。 ↓ニッコウキスゲ(ゼンテイカ)





風・ガス・小雨の中、湿原を歩く

あいにく天候は悪化し、小雨混じりの強い風が、ニッコウキスゲの花を揺らしている。ヒオウギアヤメの群れも各所にあり、小さい花々も咲いている。その中でもトキソウの可憐な花が目立っていた。ガスがかかり、湿原全体を見渡せなかったのは残念だった。



↑シャクナゲ

ガスと小雨の湿原に心を残しながら帰途についた。11:50 雄国沼休憩舎。雄子沢下山口のシャトルバス発車時刻 13:40 に遅れないようにと雄国山登頂を断念し、下りにかかる。

バスを遅らせ、多くの人に迷惑をかけた

往路を引き返すのだが、登りでは気が付かなかったギンリョウソウやウリノキなどの花が目を引き、撮影に時間をとられ、結局シャトルバスの時刻に遅れてしまった、他の登山者の皆さんと運転手さんに迷惑をかけ、全く申し訳ないことだった。

昔、化け猫の棲み処だったという猫魔ヶ岳に向かう



7月2日。宿発八方 ↑ギンリョウソウ、緑の葉はマイヅルソウ

台行きシャトルバスの乗客は私だけだった。8:20 到着。

ここは会津磐梯山登山口でもあるので、何台もの車が駐車していたが、猫魔ヶ岳への登山者は私一人のようだ。

トイレを済ませて8:40 明るいブナ林の道を歩き始める。道の両側にはマイヅルソウのハート型の葉がびっしり。この花の開花期には、それなりの見ごたえがあるようだ。



カッコウの声の中を登る

ギンリョウソウもいくつもの群落をつくって花を見せ、ユキザサの茶色の実、ツルアリドオシの赤い実も目をひく。ウグイスのさえずり、カッコウの鳴声が聞こえて

くる。やがて灌木帯の中の急登を進むようになり、ゴゼンタチバナやシャクナゲの花が散り残っていた。

↑ウリノキの珍妙な花

(葉がウリに似ているので)

眺めの良い猫魔ヶ岳山頂

9:50 猫魔ヶ岳頂上(1404m)着。計画より10分遅れだ。狭い頂上だが、南側の展望が開けており、磐梯山と猫魔ヶ岳中腹のスキー場のゲレンデ、麓の田畑や集落、そして猪苗代湖が見える。景観を楽しんでいると、涼やかな鈴の音がきこえ、すぐに長身の青年が現れた。地元の人でこの山にはよく登るらしい。

猫石から雄国沼休憩舎へ

↓オオナルコユリ

休む間もなく青年は雄国沼の方へ下り始める。私もすぐにあとを追い、10:35 猫石。休まず雄国沼休憩舎への道を急ぐ。

道はいくつもの沢を横断し、滑りやすく簡単ではない。やがて道は平坦になり、雄国沼の堤防上を歩き 11:15 雄国沼休憩舎着。昼食もそこそこに雄子沢登山口への下りにかかる。

結局、バスに乗り遅れてしまった

脇目もふらず歩いたが、結局バスに乗り遅れてしまった。同じミスを連続しておかして、がっかりして帰宅の途に就いた。

自らの脚力の衰えを痛感させられた山行だった。



↑ゴゼンタチバナ

↓ツクバネソウ

